

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

小児の昼間尿失禁と夜尿症に関する因子:エコチル調査山梨追加調査による横断的コホート研究

和文タイトル:

小児の昼間尿失禁と夜尿症に関する因子:エコチル調査山梨追加調査による横断的コホート研究

ユニットセンター(UC)等名:甲信ユニットセンター(山梨)

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名:日本排尿機能学会誌

2025 年: DOI:

筆頭著者名:志村 寛史

所属 UC 名:甲信ユニットセンター(山梨)

目的:

昼間尿失禁と夜尿症は小児の下部尿路症状として稀ではなく、種々の因子が提唱されている。胎児期や出生時、その後の成長・発達過程における様々な素因と、昼間尿失禁や夜尿症との関連を本邦の大規模出生コホート研究であるエコチル調査のデータを用いて横断的調査を行うこととした。

方法:

対象は 5 歳での昼間尿失禁と夜尿症の有無が評価できた 2595 例である。先行研究から昼間尿失禁や夜尿症と関連があるとされる 100 以上の項目で単変量解析後、さらに多変量解析も行った。

結果:

多変量解析では、双胎やうつ伏せ寝、ASQ-3(幼児の発達を評価する質問票)の問題解決の項が低値であることが昼間尿失禁となる因子であった。夜尿症の場合は男児や高齢出産、3 歳未満で通園をしていないこと、ASQ-3 の問題解決の項が関連因子とされた。

考察(研究の限界を含める):

本研究は、出生前からの母体や家庭の様々な因子、出生時、そしてその後のイベントや発育・発達など数多くの調査項目から、小児の昼間尿失禁と夜尿症に関与する因子を横断的に検討したものである。筆者らは過去に尿禁制獲得の時期について縦断的調査を報告しているが、アプローチ方法を変えての検討、昼間尿失禁と夜尿症とに分けての検討として、新たな知見となっている。特に ASQ-3 を中心とした発達に関わる項目が重要であることが昼間尿失禁と夜尿症ともに示された。

結論:

5 歳時点での尿禁制獲得の有無は発達の程度に大きく左右されると考えられた。